

令和7年1月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町1-684 Tel0428-23-6859)

青梅市指定有形文化財『青石卒塔婆』玉泉寺板碑

青梅市内の寺院の境内や墓地に青黒い板状の石碑を見かけます。これは、緑泥片石という石で作られたもので、青石卒塔婆や青石塔婆といいます。市有形文化財の一つとして、青石塔婆10基(観音寺(塩船)、玉泉寺(長淵)、報恩寺(今井)、宝泉寺(藤橋)、宗泉寺(吹上)、安楽寺(成木)、聞修院(黒沢)計8か所)が昭和39(1964)年11月に指定されています。一般に「板碑」と呼ばれており、板仏と呼ぶ場合もあります。頭の部分が山型にとがり、梵字などを書いた細長い板状のもので、死者の冥福を祈って墓石の後ろに建てられたものとされています。

卒塔婆の起こりは古く、インドでは、仏舎利(釈迦の遺骨)をまつるスツーパー(墳丘やその上の建物のこと)としましたが、中国に移り九輪や愛輪などを形取った金属の塔形の飾りとなって仏塔の一番上に置かれました。

卒塔婆とはそのスツーパーがなまったもので、日本には中国より伝わったとされています。現在では死者の供養として墓に立てる木製の板状のものを指しますが、木製の卒塔婆については、『明月記』(藤原定家の日記・鎌倉時代初期)や『平家物語』(鎌倉時代中期)にも出ていることから、中世初期頃から広まっていたと窺われます。

青石塔婆も同様に、死者を供養してその成仏を助ける修行のものと、生存中に自分の後生安楽を願うためのものがあり、多くが自分の極楽往生を願って建てたものとされます。この青石塔婆は、鎌倉時代から室町時代に流行し、関東では埼玉県や東京都に多く残っており、西日本では徳島県にもあります。関東地方に見られるために、青石塔婆のことを「武蔵型」と呼ぶこともあります。塔婆を石で作ったのは、埼玉県の山間部や荒川流域で加工しやすい石が取れたことや永く保存できるからと推測されます。

市内にある青石塔婆で、紀年銘の明瞭なものは、霞川平野の交通の要衝で、交易の地とされた今井の正福寺の弘安5(1282)年が古いものとされています。皇国地誌には、千ヶ瀬の井上家墓地に文永11(1274)年のものがあつと記録されていますが、現在は紛失しています。

弘安年間は、鎌倉時代の中盤から後半になる頃で、歴史事象では2度の『元寇』襲来があった時代です。弘安の年号をもつものは、他に今井の吉永家、塩船の師岡家、塩船寺、小曾木の若林家など併せても5基あるとされていますが、この頃が青梅地方の青石塔婆の普及の始まりとも考えられています。今井や隣接する小曾木、塩船に集中しているのは今井が交易と交通の要衝であることや早い時代から青石塔婆の造立が盛んであった入間地域の水系に関連していると推測されます。

また、中世の柚保にあたる青梅市・奥多摩町・羽村市で約二千基もの板碑が見つかっていま

すが、完全に近い形のものもあれば、風雨にさらされ、形が崩れたものもあります。板碑は建長年代(1249 年～)から永祿年代(1558 年～)のおよそ 300 年にわたり作られており、中でも建長年代のものは、多摩郡では最古の板碑であり、地域の歴史の古さを表しているものの一つです。

多摩川流域全体でも、最も古いとされる青石塔婆は長淵の玉泉寺にあるものです(写真 1)。1250(建長)年代に建てられたとされ、高さ 113cm、幅 42cm、厚さ 5.5cm ほどの大きさで、将棋の駒の様な形をしており、荒川上流域の石材産地のものと比較しても引きを取らないといわれています。

この大きさの青石塔婆を作るというその時期に先進的な行動をとった様子には、相当の権力や経済力があつた人物の存在が推測されます。中世期の長淵郷は、霞川の今寺あたりから二俣尾まで及んでおり、詳細は不明ですが、現在の長淵地区よりも広い面積を有していました。また、当時、長淵郷が多摩川流域の中心的位置を占め、郷全体の支配者が住む地であつたことは、板碑現存数が長淵地区のものが多摩川流域で最多数であることから推測されます。郷が存在し、人が多く集まり栄えた理由として、地形(地勢)の面もあげられます。現長淵地区より上流域は両岸の断崖が高くなるのに対し、下流域は広い河原を有する土地であつたため、この地が最も監視掌握に適当な地であつたことが窺えます。江戸時代では、多摩川での筏の運航では、千ヶ瀬周辺の河原で筏の組み合わせを変えることが行われていました。鎌倉時代にも運搬する諸物資が地勢に対応するために積み替えのような作業行われたのではないのでしょうか。

また、長淵(下長淵とよばれる地域)は、江戸時代初期の『正保武蔵田園簿』によると多摩川南部の杣保としては最も水田面積が大きく、中世豪族の居住地としては最高の立地であつたことが推測されます。

このように考えると、人が集まるところ(郷)や地形、地勢の面でも、中世の頃から人々が生活拠点、交易が広がり、物資や情報が盛んに交流していることが分かります。人々の生活が充実したことにより、宗教的や文化的なものがより発展していったと思われ、板碑も死者を弔うことや自分の死後のための準備として建てられたことが分かります。

【参考文献】

青梅市の板碑(青梅市教育委員会)(1980 年)

青梅歴史物語(青梅市教育委員会)(1989 年)

おうめ文化財さんぽ(青梅市教育委員会)(2024 年)



写真－1 玉泉寺の青石塔婆